

懸念的被透視感が生じている状況における 対人コミュニケーションの特徴

太幡 直也

“他者と相互作用している状況において、自分で直接的に伝えていないのに、気づかれたくない事柄を相互作用している相手に気づかれているかもしれないと感じる感覚”は、懸念的被透視感と定義される。本発表では、懸念的被透視感が生じている状況における対人コミュニケーションの特徴を明らかにするために、懸念的被透視感の強さを規定する要因、懸念的被透視感による反応、懸念的被透視感による反応に対する他者の印象の三点に関する実証研究を報告した。得られた結果から、懸念的被透視感による反応によっては、不自然な印象や発言内容が疑わしい印象を他者に与えるという、自己成就予言現象とされる事態が生じる場合があることが示唆された。

出典

太幡直也 (2008). 懸念的被透視感が生じている状況における対人コミュニケーションの特徴 筑波大学大学院人間総合科学研究科博士論文.

世間を意識する状況と世間イメージの検討

山岡 重行

本研究は受容と排斥という観点から、大学生の世間意識について検討した。大学生 260 名を対象とし調査を実施した。日常生活の世間を意識する程度に関して、回答者の 53.9% が 5 件法の内「2: やや意識する」と回答 ($M=2.51$) しており、大学生の世間の意識度はあまり高くないといえる。イメージする世間の人々に関して質問したところ、大学生は自分より年上でご近所から同じ国に住む人々を世間の人々としてイメージしていることがわかった。世間イメージの調査から大学生は世間を優しく親しみやすいものとして好意的にイメージしていることがわかった。世間を意識する状況に関しては、みんなと一緒に政治や社会問題、流行について話をするときに世間を意識する傾向が強いことがわかった。現在、社会人を対象とした調査を行っており大学生と社会人の世間意識の違いについて比較検討する予定である。

「世間」の意味と用法に関する予備的検討

外山みどり

「世間」の意味と用法を明確にするため、まず主要な辞書によって、字義的な意味を確認した。その結果、仏教用語としての字義を除いて、心理学的研究の対象となりうる「世間」の意味としては、①人が集まって生活している場、世の中、という意味と、②世の中で生活している人々、という意味とに集約することができる。さらに、人々の交際、または交際の範囲を指す意味に関連する場合もある。②の世の中の人々に関しては、人そのものというより、意見をもち、情報を伝達し、評価および是認・否認を行うという心理的機能に重点を置いた用法が多い。続いて、現代の大学生が「世間」を含む表現をどの程度使用するかに関して、小規模な調査を行ったところ、世間体、世間知らず、世間は狭いなどの表現が上位に挙がった。「世間」に関する考察、研究を行うにあたっては、「世間」の意味するところに関する入念な検討が必要である。「世間」という語が各人にもたらず語感、ニュアンスも重要な意味をもつ。字義的・外延の意味のみならず、「世間」の内包的意味についても吟味する必要があると思われる。

大学生における「世間」と「社会」の捉え方に関する予備的研究

高橋 尚也

日本において「世間」とは身内と他人との中間帯で個人間の関係の環と定義される語であるのに対し、「社会」は西欧個人主義を前提に、部分社会から全体社会を含む広範囲な対人関係を意味する語とされている。本研究の目的は、大学生39名を対象とした質問紙調査を通して、世間と社会という語の捉え方の違いを探索的に分析することである。その結果、回答者が世間と社会とを主観的に意識する程度には有意差がみられなかった。しかし、回答者が世間に含まれると判断した人物カテゴリ数は、社会に含まれるそれよりも有意に少なく、「親」「兄弟姉妹」「恋人配偶者」「サークルの友人」は世間よりも社会に含まれるカテゴリで

あった。また、世間から連想する内容について自由記述を求めたところ、参照基準を意味する内容が多く含まれていたが、社会から連想する内容について自由記述を求めたところ、就職先や社会システムを意味する内容が多く含まれていた。身内と他人との中間帯である「世間」への気づきが社会的ネットワークと向社会的行動を促進する可能性が議論された。

出典

Takahashi, N. (2011). Primary study concerning awareness of "Seken" and "Society" in students *2011 Annual Conference of the Korean Psychological Association International Conference on "Psychology toward Happiness"*, August 25-27, 2011, Chonbuk Univ., Jeonju City, Korea.

大学生の『世間』の範囲

清水 裕

世間の構造を論じている井上（2007）は、セケンがウチの集団（ミウチ）とソトの集団（タニン）の間にあり、その範囲は個人々の主観により変化するとしている。本研究では、我々が『世間』の範囲をどう認識しているのかを明らかにするための基礎研究として、首都圏の大学生（男子130名、女子151名）を対象に質問紙調査を集団実施した。「世間は厳しい」、「世間の声」、「世間ではスマートフォンが流行している」、「世間体が悪い」、「世間の常識」、「親切な人に助けられ、まだまだ世間は捨てたものではない」、「世間に顔向けできない」、「世間の目を気にする」、「世間」の9条件（各30～33名）に関して、『世間』に含まれる人物を30種類の中から選択させたうえ、「世間」条件（基準）とそれ以外の8条件の間での『世間』に含まれる人物の差違を明らかにするため、該当者と非該当者の頻度の差に関するFisherの直接確率検定を行った。結果として、世間から厳しい批判を受けそうな場合には、世間にタニンが入り（世間の目）、ミウチが抜ける（世間は厳しい）が、羞恥を意識する場合には、世間にミウチが入る（世間に顔向けできない）ように変化することが明らかになった。

引用文献

井上 忠司 2007 「世間体」の構造 社会心理史への試み（講談社学術文庫）

出典

清水 裕 2011 大学生の『世間』の範囲と援助しやすさ 日本グループ・ダイナミック

クス学会第 58 回大会発表論文集, 84-85.

清水 裕 2011 世間に対する認識—大学生の世間の範囲—世間心理学—『私』と『世間』との心理的交流—日本グループ・ダイナミックス学会第 58 回大会ワークショップ 日本グループ・ダイナミックス学会第 58 回大会発表論文集

「世間」のものの見方の共通認識と 認識源に関する予備的研究

—「世間」のものの見方は確かに共有化されているか？
「世間」の認識源はどこにあるのか？—

吉原智恵子

本研究では、人々が個々に抱く「世間」のものの見方についての共有化/非共有化の様相を探索的に調べることを第一の目的とし、さらに「世間」のものの見方についての認識の源泉を明らかにすることを第二の目的として質問紙調査を行った。調査対象者は日本福祉大学の学生 74 名であり、日本福祉大学の学生に対する「世間」の見方をどのように認識しているのかについて、自由記述による回答を求め、さらにその認識の源泉等をたずねた。その結果、「やさしい」「福祉の志」等、福祉に関わる評価を中心として共有化された認識内容が見られた一方、頻度は低い内容として相反する評価や、他者と共有化されていない認識内容も含まれた。また内面的な評価に関わる認識内容についてはウチの関係にある人（親族と友人）を、また社会と個人との連結を想定した公的・外面的評価に関わる内容についてはソトの関係にある人を源泉とすることが明らかになった。これらの結果をもとに、「世間」のものの見方を伝播するコミュニケーション過程や、主体としての「私」の関わりと自己機能、および世間と集団主義との関連等について議論した。

吉原智恵子 (2011). 「世間」のものの見方の共通認識と認識源に関する予備的研究—「世間」のものの見方は確かに共有化されているか？ 「世間」の認識源はどこにあるのか？—日本福祉大学研究紀要 現代と文化, 124, 99-112.

世間の意識化に影響を及ぼす要因の検討— “ランチメイト症候群”を通して

藏本知子

世間を意識化し感情を生起する要因を検討するため、一人でランチしているところを他者に見られたくない“ランチメイト症候群”を題材に、首都圏の女子大学生に質問紙調査を実施した。一人ぼっちを他者に見られたくないと感じている時は世間を意識化した状態であると捉え、実際にそのように感じたことがあるかを質問した。この回答を従属変数としてステップワイズ法による判別分析を行った結果、「世間は一人でランチする人を魅力のない人だと思うと思う」と、「ランチメイト症候群に共感する」の2つの項目が投入された。「自分自身が一人でランチする人を魅力のない人だと思う」かどうかは、影響を与えなかった。世間の意識化には、自分自身の考えではなく、世間の意向が重要であり、世間の意向と適合する状況に自らが陥った時、世間を意識化する可能性があることが示された。

さらに、世間として頭に思い描く人物像と、実際に世間の意識化を促した人物（代弁者）を比較した。この2つは異なる人物像だった。前者は、世の中の知らない人など未知で、好悪の情はなかった。後者は、友達など親しみがあり、どちらかというとき好きだった。

世間に対する自己機能

飛田操、下斗米淳、風間文明、角尾美奈

「自己」が「他者」を通して「世間」を感知し、「私」に「世間」と「自己」との関係の在り方を伝え、その結果「自己」による「世間」への適応行動が生じる過程（中村、2011）について実証的に明らかにすることを試みた。一連の研究（風間・下斗米・飛田・角尾、2010, 2011；角尾・飛田・下斗米・風間、2010, 2011）で、個人の言動が「世間」の「伝達者」である他者のそれと整合あるいは不整合する事態をとらえ、この経験をどのような事態として認知するかによって「自己」がどのように「世間」を感知し、「世間」との関係において自らの言動の

調整を試みるか検討した。その結果、整合事態では、他者を「世間」の「代弁者」と認知するほど、「世間」へ「自己」を、あるいは「世間」を「自己」に合わせる反応が高まり、新たな別の「世間」を探そうとする行動や欲求が高まることが示された。一方、不整合事態では、「世間」の「代弁者」と認知するほど、諦める、何もしないでおくという反応が低下した。これらの結果は、「自己」には「世間」に「私」が適応していく上で必要な世間伝播と反応調整という機能があることを想定させるものであり、また「自己」の能動性と主体性を示していると考えられる。

出典

- 風間文明・下斗米淳・飛田操・角尾美奈 (2010). 世間に対する自己機能 (2)—自己の世間適応機能の検討—日本社会心理学会第 51 回大会発表論文集, 372-373.
- 風間文明・下斗米淳・飛田操・角尾美奈 (2011). 世間に対する自己機能 (4)—世間への適応反応の検討—日本社会心理学会第 52 回大会発表論文集, 140.
- 中村陽吉 (2011). 世間心理学とはじめ 東京大学出版会
- 角尾美奈・飛田操・下斗米淳・風間文明 (2010). 世間に対する自己機能 (1)—自他整合性の伝播機能の検討—日本社会心理学会第 51 回大会発表論文集, 370-371.
- 角尾美奈・飛田操・下斗米淳・風間文明 (2011). 世間に対する自己機能 (3)—自他の整合・不整合事態における世間伝播機能の検討—日本社会心理学会第 52 回大会発表論文集, 139.

世間からの排斥および世間意識尺度の 予備的調査

中江須美子

本研究では、個人の世間観を測定する尺度（以下、「世間意識尺度」とする）を作成し、個人が世間からの排斥をどう感じ対処するかといった事柄と世間観との関連について、予備的に検討を行った。世間意識尺度として 28 項目（5 件法）を新たに作成した。重み付けなし最小二乗法（promax 回転）の因子分析の結果、4 因子が抽出された（世間への意識・関心、世間への否定的認知、世間の正しさへの信念、世間の情報源としての利用、 $\alpha = .69 - .83$ ）。各因子と世間からの排斥恐怖（5 件法）との相関分析の結果、「世間への意識・関心」「世間の情報源としての利用」と排斥恐怖の間に有意な正の相関が見られた。また、各因子得点を従属変数として、「世間から受け入れられるように己を律し身を正しく保つよ

うにする/しない（清廉・克己）、「世間から排斥されないためにしきたりから外れた行為を繰り返さないようにする/しない（逸脱回避）」によるt検定を行った結果、克己・清廉する群の方がしない群よりも「世間の正しさへの信念」「世間の情報源利用」得点が高く、逸脱を回避する群はしない群よりも、「世間への意識・関心」得点が高いことが示された。

世間観および世間からの排斥尺度の予備的調査

古賀ひろみ

大学生を対象に世間の「Experience」「Knowledge」「Ostracism」について予備的調査を実施した。

「Knowledge」では「世間」という言葉について調べた結果、日常の「世間」利用頻度はやや高く、類語には「世の中」「社会」「一般」「常識」「周囲」（以上複数回答）、「関係」「普通」「みんな」「接したことのない人」（以上単一回答）等が挙げられた。

「Experience」では「言動を通し世間を意識する相手（対象）」及び「内容」の影響を調べた結果、対象との直接/間接的接触に差は見られず「家族」「友人」「マスコミ」「ネット」等どの対象を通して中程度意識されていた。内容では「直接」「同」「好意」に比べ「複数」「別」「否定」意見に世間が意識されやすい傾向も示唆された。

「Ostracism」では排斥を「少し」「かなり」怖れる傾向と、「世間」利用頻度との弱い正の相関が示された。排斥に対しては「受容にむけ努力」し、そのために「己を律する」「しきたりから外れた行為を繰り返さない」方略をとる傾向が見られた。

世間からの排斥および世間観と制御焦点の 個人差との関連

中江須美子

本研究では、世間観と制御焦点の個人差との関連、及び、世間を含む社会的排斥場面における制御焦点の個人差の影響を検討した。世間観の測定には「世間意識尺度」(中江、2010)、制御焦点の個人差の測定には「自己制御フォーカス尺度」(中江、2006)を用いた。世間を含む社会的排斥場面での反応については、下總・押見(2010)のシナリオ実験を一部改変して実施した。その結果、予防焦点優位群は促進焦点優位群よりも世間への興味・関心が強く、ネガティブな社会的場面経験後に心理的な影響を大きく被ることが分かった。また、各シナリオにおいてその後の他者に対する攻撃性予測について検討するため、日常トラブルへの対処法(5項目)を従属変数とした3(状況シナリオ:世間からの非受容/個人的達成の世間的失敗/特定二者関係の破綻)×2(制御焦点;予防/促進)の分散分析を行った結果、「特定二者関係の破綻」では制御焦点による違いはみられず、「世間からの非受容」では予防焦点優位群の方が、「個人的達成の世間的失敗」では促進焦点優位群の方が、それぞれ社会的排斥を経験した後に他者に対する攻撃傾向が高くなることが示された。

「世間からの排斥」の シナリオ思考実験法について

平田万理子、古賀ひろみ、下總貴子、中江須美子、押見輝男

世間からの排斥とは、社会的排斥の1形態であり、世間における自分の居場所の喪失、世間における自分の存在の抹消、あるいは、その種の脅威を覚える現象である。世間からの排斥およびその脅威がもたらす効果を実験室的実験で検討することは困難さを伴うので、本研究ではその代替策としてシナリオ思考実験用の材料を作成した。状況シナリオは、世間からの排斥の「プログ炎上」、重要他者からの拒絶の「親友による無視」、統制条件として、対人関係の要素を含まない

個人的動揺の「不首尾な個人的達成」、世間からの受容の「世間的賞賛」を作成した。従属変数として用いる内的心理尺度は、先行研究結果から11次元選定し、各次元に3項目配置した尺度(5-point)を作成した。行動予測尺度は、挑発を伴わない攻撃行動と、不利益をこうむった際の言語的攻撃を描いたシナリオを作成し、回答法は前者では他者反応の共感的予測、後者は自己反応予測とした。

世間からの排斥による行動的影響および 内的心理状態への影響

—特性自己コントロールとの関連から—

下總貴子・押見輝男

世間からの排斥による心理行動的影響について、シナリオ思考実験により検討した。排斥による行動的影響として、白色ノイズ強度の評定値に条件の主効果が見られ、世間条件は個人的動揺条件よりも強度が高かった。また、排斥による情動・認知的影響を検討するため、まず、排斥後の内的心理状態尺度(33項目・5件法)について因子分析(主因子法・promax回転)を行った。3因子18項目が抽出され(無力感因子・焦燥因子・自己尊重因子)、信頼性係数は $\alpha = .67 - .77$ であった。条件および特性自己コントロール(自己コントロール尺度:宮崎・中江・古賀・押見, 2007)による行動的・心理的影響を検討するため、3因子の下位尺度得点および白色ノイズ強度を従属変数とし、条件(世間・特定他者・就職活動)×自己コントロール(高・低)の多変量2要因分散分析を行った。交互作用は有意ではなく、白色ノイズ強度および焦燥得点について条件の主効果が(白色ノイズ:世間>個人的動揺;焦燥:個人的動揺>特定他者)、自己尊重得点について自己コントロールの主効果が見られた(高群>低群)。

独自性欲求による「世間」観の違い —差異の表現に関する捉え方について—

平田万理子

世間の捉え方（世間観）における独自性欲求の影響を明らかにするため、「おもしろい人」、「変わっている人」、「個性的な人」、「マイペースな人」などの独自性を示すと考えられる27の人物表象を取り上げ、それらが世間にどれくらい含有されていると思うか、また受容されていると思うかについて質問紙調査を行った。その結果、いくつかの表象で独自性欲求の高低による影響が示され、「意表をつく人」、「枠にはまらない人」、「自分を知っている人」という表象において、独自性欲求高群は、そのような人物が世間に含まれると考える程度が低く、独自性欲求の高い者が、世間の構成員として独自性の高い者の含有率を低く見積もるフォールス・ユニークネス効果が生じていることが示唆された。また、世間からの受容度については、「変わっている人」、「ひょうひょうとしている人」という表象において独自性欲求の高低による影響が示され、独自性欲求高群は、そのような人物が世間から受容されていると考える程度が低く、独自性欲求の高い者が、世間から自分たちが排斥されているように感じている可能性のあることが示唆された。